

「事なき柴」をめぐつて

はじめに

宗像市大島は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群として、沖ノ島、宗像大社辺津宮などと共に、平成二十九（二〇一七）年世界遺産に登録された島である。宗像三女神のうち湍津姫神を祀る中津宮がある。七世紀後半から九世紀には、大島の御嶽山山頂に祀られていたが、現在御嶽山の麓で、海に面した地に社殿がある。島の人々の篤い信仰に支えられ、年間多くの神事が斎行される。その中に、「事なき柴」がある。といつても、この神事は中津宮で行われるが、大島の人は一切関与しない。福岡県遠賀郡芦屋町の漁師によって行われる祭りである。

そして福岡市東区志賀島でも、同名のものがある。ここでは、両者の「事なき柴」について詳細に調べて、「事なき柴」とは何か、そしてその背景にある信仰を明らかにすることを目的とする。以下、令和二（二〇二〇）年と令和三年に行った調査に基づいている。

一、大島の「事なき柴」

（一）遠賀郡芦屋町

遠賀郡芦屋町は、北九州市に隣接している人口一万三千人ほどの

町である。響灘に臨む遠賀川沿いにある（図1）。

『日本書紀』巻八仲哀天皇八年正月の条に、仲哀天皇と神功皇后が筑紫に行幸されたときのこととして記事がある。

岡縣主の祖熊鰐、天皇の車駕を聞りて、予め五百枝の賢木を拔じ取りて、九尋の船の舳に立てて、上枝に白銅鏡を掛け、中枝には十握剣を掛け、下枝には八尺瓊を掛けて、周芳の沙塵の浦に参迎ふ、魚塩の地を献る。

とある。現在の福岡県遠賀郡芦屋町の岡の県主である熊鰐は、仲哀天皇の行幸を聞いて服属を誓い、あらかじめ五百枝の賢木を取って、九尋の船の舳に立てた。そして三種の神器の白銅鏡、十握剣、八尺瓊をかけて、

吉田扶希子



図1 芦屋町と大島

周防のサバの浦にお迎えに出かける。現在の山口県防府市佐波かといわれる。そして魚や塩が取れる地を献上したという。さらに続く。

既にして海路を導きつかへまつる。山鹿岬より廻りて岡浦に入ります。水門に至るに、御船、進むこと得ず。則ち熊鰐に問ひて曰はく、「朕聞く、汝熊鰐は、明き心有りて参来り。何ぞ船の進かざる」とのたまふ。熊鰐奏して曰はく、「御船進くこと得ざる所以は、臣が罪に非ず。是の浦の口に、男女の二神有り、男神をば大倉主と曰す。女神をば菟夫羅媛と曰す。必に是の神の心か」とまうす。天皇、則ち祷祈みたまひて、挾抄者倭国の菟田の人伊賀彦を以て祝として祭らしめたまふ。則ち船進くこと得つ。

とある。遠賀郡山鹿郷の山鹿岬、つまり遠見ノ鼻（岩屋崎）を廻つて、外海から岡浦に入った。ところが、岡水門に来ると、船が進まなくなった。「忠誠心をもって臨んだはずなのに、何故船は進まないのか」と天皇は熊鰐を責める。すると「これは、この浦にいます大倉主と菟夫羅媛の神の御心のせいだ」と熊鰐はいう。そこで、倭国の菟田（奈良県宇陀郡）の伊賀彦を神官として、その神々を祀らせた。するとすぐに船が進んだという。大倉主神と菟夫羅媛は、芦屋町岡湊神社に祀られている神である。岡湊神社は、「岡倉社」とも古くは称し、素戔鳴尊を配祀する芦屋町の産土神である。かつては、入海に出た「岡の上」に鎮座していた。

そして神功皇后だが、

皇后、別船にめして、洞海より入りたまふ。潮廻て進むこと得

ず。時に熊鰐、更還りて、洞より皇后を迎へ奉る。則ち御船の進かざることを見て、惶懼りて、忽に魚池・鳥池を作りて、悉に魚鳥を聚む。皇后、是の魚鳥の遊を看して、忿の心、稍に解けぬ。潮の満つるに及びて、即ち岡津に泊りたまふ。

とある。神功皇后は、仲哀天皇とは別の船で、洞海湾より入ったが、潮が引いて進まなかった。そこで、熊鰐は迎えにあがった。そしてすぐに魚池・鳥池を作り、魚や鳥を集めた。その魚や鳥に神功皇后は心を癒され、怒りをおさめられた。やがて潮は満ち、船は進むことができ、神功皇后は、岡津に泊まられたとある。

「岡水門」は遠賀郡河口の湊で、後の芦屋津である。博多と畿内との航路の中継地として発展した地である。江戸時代には大坂・江戸、遠くは松前（函館付近）まで往来し、商人たちが活躍した。廻船問屋も栄え「芦屋千軒・関千軒」とよばれた。

生業として、商業、農業の他、漁業が盛んで、一本釣り、刺し網が主体である。

（二）大島中津宮参詣の「事なき柴」

福岡県遠賀郡芦屋町の漁業従事者によつて、一月八日から九日にかけて「事なき柴」を行う。以前は、一月十五日までのうち、天候をみて、シケの日に決定していた。この日は漁止めにする。令和三年（二〇二二）年は、諸事情により、一月十一日に実施した。二十年ほど前に、現在の一月八日・九日に固定された。宗像市大島で代表者が「事なき柴」を作り清めてもらい、芦屋町に持ち帰ってお守りとする。何事もなく大漁となりますようにと祈願するもので、芦屋

町漁業協同組合（遠賀漁業協同組合芦屋支所）が中心になって行い、「大島参り」とよばれる。

まず前日一月七日に、クジをひいて行く人を決める。組合員が六十人ほどいた頃には、六人もしくは四人で大島に行っていたが、現在は組合員二十人から三人を選ぶ。箱から「沖津宮参拝」と書いた紙を引けば当たりである。不思議と、三人のうち一人は経験者が当たることが多く、その人に倣う形で行事を進める。地域の代表ということで、名譽なことで、使命感や誇りもあり、喜んで参加しているという。抽選なので、続けて行く者ができる場合もあるが、長年行くことができない者もいる。純粹に抽選である。

当日、三人が芦屋町漁業協同組合に集合して、宗像に向かう。特に出かける前に、地元の神社に参詣や、見送りや出発式のようなものはない。代表者三人が、購入した昆布・スルメを持って、大島行きの船が発着する宗像市神湊の神湊港渡船ターミナルにタクシーで向かい、十一時二十五分発のフェリーで大島に行く。かつてターミナルより手前で、漁港がある宗像市鐘崎まで歩いて行き、その漁師から權船を借りたり、乗せてもらったりして渡航していた。大島に行く理由として「事なき柴」のことを話すと、皆喜んで乗せてくれたという。

大島に到着すると、まず中津宮に、島に参りましたという挨拶をしてから、沖津宮遙拝所に行く。ここから約五十^キ離れた沖ノ島の姿が見えるが、入島することができない沖ノ島に祀られる沖津宮を拝むことができる場である。中津宮から徒歩約三十分のところであり、芦屋町の人は、島内の移動にはタクシーを使う。

遙拝所参拝後、遙拝所の下の斜面に繁るハマビワの枝葉を取る。これが「事なき柴」となる。ここには数本自生しており、「事なき柴」を取り続けても、当分なくなる心配はない。採取する場所の細かな決まりは特になく、芦屋町漁業組合員の数だけ、傷がない枝葉を取っていく。必ず一人分に二枚葉がつくようにする。それから中津宮に戻って参拝し、取ったばかりの「事なき柴」用の葉と、昆布、スルメを初穂料とともに納める。これでこの日は終了となる。この日の島での予定は、島に行ったメンバーで決めて行い、順番などに厳しい決まりはない。定宿の民宿「沖廣屋」に宿泊する。

翌日午前七時頃、まず沖津宮遙拝所付近の海で禊をする。顔と手を海水で洗う程度である。二十年ほど前までは、午前五時頃に、沖津宮遙拝所の北側の海に全裸で入って禊をしていた。禊後に遙拝所を参拝し、中津宮に移動して御祈願となる。神職と芦屋町の漁師三人だけで、神事を行う。大島の人は一切関与しない。年長順に、玉串奉奠をして終了である。その後社務所にて直会がある。カズノコやノウサバが、神社の方で用意されている。そして昆布・スルメとともに、沖津宮のお札、完成した「事なき柴」をいただく。「事なき柴」は、昨日採った葉を清めた後、

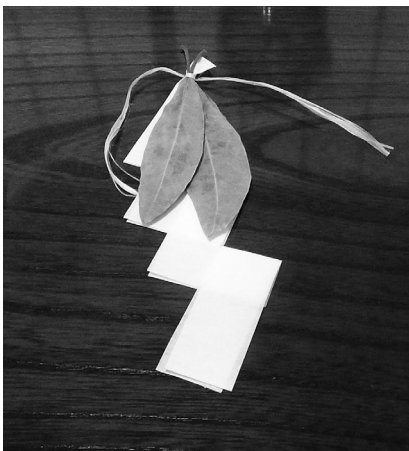


写真1 大島参りの「事なき柴」

「シメノコ」という紙垂を二枚つけ、上部を麻紐でまとめられたものである（写真1）。

民宿「沖廣屋」に戻ると、襖で冷えた体のために風呂が沸かされ、温かい鍋が用意されている。「沖廣屋」にも「事なき柴」を一つ渡し、午前中のフェリーで帰路に就く。

芦屋町では特に出迎える行事はなく、その日のうちに組合員が、島から帰って帰った昆布・スルメ・沖津宮のお札・「事なき柴」を各自組合事務所に取りに来る。そして持ち帰った「事なき柴」は、家の玄関のしめ飾りの上に取り付けて、一年間そのまま飾る。以前は神棚に飾っていた。家だけに飾り、漁船にはつけない。船には、お守りとして沖津宮のお札をつけている。はずされた前年の「事なき柴」は、正月飾りと共に、十五日の「どんど焼き」（正月飾りをお焚き上げにする小正月の行事）でお焚き上げにする。

（三）小結

「大島参り」は、芦屋町全体で行われているわけではなく、遠賀漁業協同組合芦屋支所がある西浜周辺のごく狭い範囲で行われる。この地区の漁師の習俗である。芦屋町の漁師は、大島同様に沖ノ島周辺で、船に寝泊まりして漁をしていた。そして彼らも大島の人々と同様に沖ノ島を崇拜し、航海安全と大漁を祈願している。「大島参り」の「事なき柴」は、その信仰の現れである。家の玄関に飾りながらも、大漁祈願をするものである。

二、志賀島の「事なき柴」

（一）志賀島

志賀海神社がある志賀島は、福岡県福岡市東区志賀島。福岡市中心部より、フェリーで三十分の距離にあり、周囲約十二キロ、最高標高一六五メートルの陸繋島である。島内の集落は、志賀、弘、勝馬の三つの地区に分かれる。志賀の地域は漁業従事者が多く、反対に勝馬は農業従事者ばかりで、弘は半農半漁である。自治会は本町、中町、西町、新町、馬場町、弘、勝馬の七つである。

海の中道から志賀島橋を渡って島に入ると、北方に大きな鳥居がある。志賀海神社の一の鳥居で、ここから神社に繋がる参道が延びている。約五〇〇メートル進むと、神社の石段が見えてくる。石段下には、お清め用の「お

潮井」の海砂が置かれ、参拝者自ら足元に左、右、左とかけて身を清めてから神社に入っていく。このお潮井は、祭りの場面で必ず登場する。石段を上がっていくと、境内社の山神社などを通って山門を抜け、庭（斎庭）を通り石段を上がると拝殿がある。その

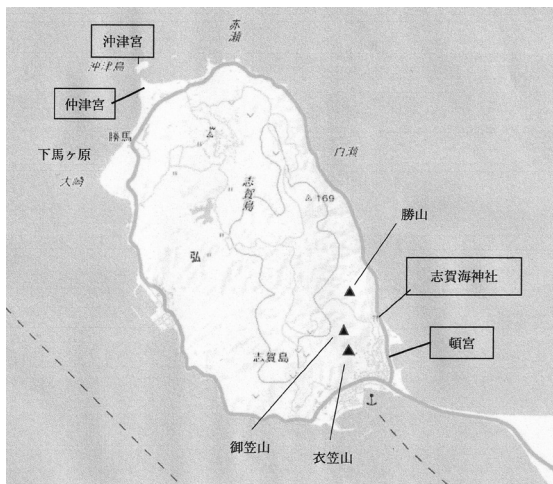


図2 志賀島全図

左手奥に今宮社、そして本殿を囲むように末社が配置される。

志賀海神社は、綿津見三神を祀る。伊弉諾尊が黄泉の国から戻り、死の穢れを祓うため、「筑紫の日向の橘の小戸の櫛原」で禊を行ったときに生まれた神である。海の底から底津綿津見神、中から仲津綿津見神、上から上津綿津見神の海神三神が生まれた。神社は「海神の総本社」「龍の都」といわれる。海上交通、特に玄界灘の交通の要衝で、また博多湾の総鎮守として、その安全を守っている。同時に、塩や魚介類など海からの豊かな恵みをもたらし、祓い清めにより、病氣平癒、健康長寿、家内安全のご神徳があり、島民に篤く信仰されている。また昔松浦から連れ去られた子どもたちを助けたことから、子ども守護のご神徳もある。

境内には今宮社があり、神事は必ず本殿と今宮社で行われる。

『日本書紀』神代上第五段や、『古事記』上巻に、「三柱の綿津見神は阿曇連等が祖神と以ち拜く神なり。故、阿曇連等は、その綿津見神の子、宇都志日金折命の子孫なり」とあるように、阿曇族が綿津見三神を祖先神として祀り、代々神社に奉職している。今宮社には、その祖神たる宇都志日金折命の他、住吉三神、天兒屋根命、阿曇磯良丸命など阿曇諸神を祀っている。

また志賀島の西北部には、干潮時には歩いて渡ることができる島で、摂社沖津宮が祀られる小島がある。綿津見三神のうちの上津綿津見神、天御中主神を祀る。その向かいの高台には摂社仲津宮があり、仲津綿津見神を祀る。この高台は七世紀前半築造の古墳で、平成六（一九九四）年の福岡市の調査で、竪穴系石室が確認された。勝馬を中心とした海人集団の首長の墓とみられる。

さらに海の中道の先端部に、摂社大嶽神社がある。志那都比古神、志那都比売神、保食神、神功皇后侍従の大濱を祀る。年に一度初午祭が盛大に行われる。

島には、神功皇后が身重ながら戦って勝利した「新羅の役」の伝承が多く残る。記紀にも記される話だが、後の元寇の際には、『八幡宇佐宮御託宣集』や『八幡愚童訓』に、干珠・満珠を用いて勝利する話として登場し、わかりやすい物語となっている。その結果、八幡信仰が大いに流布することとなる。干珠・満珠は、海の干満を自在にできる海神の呪具で、神功皇后は、これを適宜敵前の海中に投下して大勝利するのだ。志賀三山の勝山の名は、この勝利から名付けられた。また皇后の願いがかなったという「叶の浜」や、「勝馬」「下馬浜」のように皇后の馬に関する伝承地がある。

『筑前国風土記』逸文に、氣長足姫尊（神功皇后）が船で新羅に向かうとき、夜この島に停泊したとある。まず神功皇后は、侍従の小濱に火を探させたが、早く手に入れて戻ってきた。次に侍従の大濱が「近くに家があるか」と問うたところ、「この島は打昇浜と近く、地形も相続いている。ほとんど同じ土地といつてよい」と答えた。そこで「近の島」と言ったものが訛って、「資珂の嶋」とよんでいるとある。神功皇后の新羅の役に、大濱と小濱も随従したと考えられる。また『日本書紀』卷十応神天皇三年十一月条によれば、大濱は阿曇連の祖大濱宿禰という。

『八幡愚童訓』によれば、神功皇后は、干珠・満珠を海神から借りるために龍宮へ行く際、水先案内を阿曇磯良に任せようとする。しかし磯良は長年海底で暮らしていたため、体中に貝や海藻が付い

ており、このように醜い姿では海から上がれないといつてそれを拒む。そこで住吉神に相談すると、磯良が好きな「細男舞」をすれば、必ず海から出てくるという。そこで海中に舞台を作り、五人の神楽男の演奏に合わせて、八人の乙女（八乙女）^{やおとめ}が舞いを舞った。これが神楽の起源であり、神社に伝わる「八乙女の舞」のことである。

また同書には続いて、「顔之悪キ事ヲ恥給テ淨衣之袖ヲ取テ顔ニ覆ヒ御頸ニ鼓ヲカケセキナト云舞ヲ舞スマシ給テ」とある。その様子を再現した舞が、御神幸祭の「鞆鼓の舞」である。

（二）祭りに関わる人々

ア 社人

志賀海神社の祭りは、神職の他、「社人」によつて斎行される。『筑前国続風土記』に、「当社神職の長たる者三家有。大宮司、別当、禰宜是也」とあるが、「社人」は神職資格者ではなく、島の一般男性であり、座が形成される。まず大座、小座の二つに分かれ、大座は一番座（大宮司）、二番座（禰宜）、三番座（別当）で、各々一良、二良、三良、四良と分かれる。小座は四番座（検校）、五番座（宜別当）、六番座（楽座）で、各々一良、二良、三良、四良と分かれる。計二十四人だった。^③

現在は給料制だが、かつて年手当を給していた。「志賀島雜記」に、大宮司一良に米六俵、禰宜一良には米八俵、別当二良には米四俵を支給していたとある。禰宜一良が大宮司一良より多いのは、^④「実権は禰宜にあるため」とある。「今は祠官の家もおとろえて、

土民にひとしくなれり。され共今もむかしの神職の苗裔、猶日々月々の祭祀を執り行へり」とあるように、家柄で決まった者が社人を務め、祭祀を行っていた。

大祭国土祭の早朝、「座つき」があつた。生後百日までは忌の關係で神社に参拝することはできないため、生後百日以上で、去年の「座つき」以降に生まれた男子の乳幼児に座が決まる。御座帳に記入され、将来社人となる資格ができる。記入がなければ、奉仕できないという。^⑤神社に奉仕することを誓うのだ。その時に決定した座は、一生変わることはない。座は、大宮司が人気で希望者が多い。しかし、そうなるとなかなか神社に奉仕することができないため、あえて大宮司を避けて六番座に就き、早く神社で奉仕したいと望む者もいた。亡くなつて欠員がでた場合、その座の中で順に上に上がる。今は座を決めることはない。昭和三十七年には二十一人いた社人も、現在は四人（うち一人は見習い）だけで、昔と同じ形で続けることは難しい。

昔は志賀地区の者に限定され、弘や勝馬の者は社人にはなれなかった。しかし現在は関係なく、年齢により他の仕事を退職した者のうち、神社への奉仕を希望する者、もしくは神社から声をかけられた者が社人となっている。総代だった人もいる。まず「見習い」として入り、しばらくした後、三日間神社に参籠する「位上げ」を受けて、一人前の社人となる。前日から肉を食べることを禁止し、当日は海に入り禊をしてから神事に臨む。「位上げ」後は、神職しか入ることができない幣殿の立ち入りも許されている。

社人は、白衣・白袴で奉仕し、神事が滞りなく行われるように、

神職を補助している。朝四時半には出社し、日常の清掃、祭器具の準備、洗米の準備などの他、神事の前に祓詞を奏上する「前祓い」、神事中の太鼓や笛の奏上、神饌の用意、神饌献撤の補助をする。毎日欠かすことがない日供は、一日に朝夕二回行われるが、神饌の用意をする。まず朝九時に朝日供祭があり、神職により修祓、神饌を祓つて供え、祝詞を奏上する。このとき、この日誕生日の氏子の名前を読み上げる。今日一日安心して過ごせますように、この一年が無事でありますようにと願いをこめ、地域名と名前をよぶ。島内在住者だけでなく、嫁いだなどと島を離れた者の名前も名簿には記される。亡くなった報せを受けて初めて外されるもので、名簿に記載がある限り、名は呼ばれ続ける。誕生日を迎えた本人たちも楽しみにしており、その日は初穂料を持って参拝に訪れる。氏子と神社の強い関係を感じることである。神職が本殿、今宮社と神事をして、その他の境内社は拝礼だけで終わる。

夕方十六時に夕日供がおこなわれる。十五時頃、社人は朝の神饌をいったん下げ、新たに夕日供祭のための神饌を用意する。神職が夕日供祭を進めている中、社人は賽銭を集める。神事終了後に神饌を下げ、祭器具も片付けていく。もちろんご朱印など参拝者の対応もする。そして祭事では、特別な役割を果たしている。

イ 氏子総代

「総代さん」は、本町、中町、西町、新町、馬場町、弘、勝馬の七町内の各町内から男性三人ずつ、計二十一人で構成される。但し令和四年現在、十八人である。総代は、社人と違い、神事の場をつ

くって奉仕する。祭場の整備、道具の作製である。社人と同様、白衣、白袴で奉仕する。準備・後片付けは体を動かすものだが、そういった作業も必ず白装束で行う。白装束でなければ、幕などのお宮の道具には触ることはできないという。しかし道具の中でも、提灯は社人しか触ることができない。こういう点で、社人と総代は明確な線引きがされている。総代の役も代々務める人が多く、「家で決まっているようだ」と、ある総代は話していた。彼らは持ち回りで、神社に宿泊・警護する「御番」も務め、令和四年は計六人で担当している。

ウ 八乙女

また「八乙女」という集団がある。前述の阿曇磯良を誘い出す伝承に基づく神社に奉仕する年長の女性である。老いが穢れをなくすといわれ、老女が務める。家付き（世襲制）である。実際昭和三十七年に八乙女だった者の子孫で、現在八乙女になっている者がいる。山誉め祭、七夕祭、男山祭・御神幸祭・夜渡祭よどきなど大祭には必ず出仕し、小祭には出ない。つまり八月六日・七日と続く七夕祭は、同じ神事でも六日の七夕朝祭、七夕夕祭には出仕しないが、七日の七夕祭には出仕する。その名の通り本来八人だが、令和四年は四人で、祭りによつては三人のときもある。責任をもって、必ず八人揃えなければいけないというが、現在ではそれも難しい。

かつては初めて八乙女になるときは、社人同様「位上げ」といって、宮司が神酒を持って一緒に島内を巡った。昭和三十七年頃にはそれもなく、先輩八乙女が先達となり、島を廻ったとい^う。

八乙女は「八乙女の舞」を供奉する。前述した神功皇后の新羅の役の際、磯良を海底より誘い出すときに舞った話に基づいたもので、太鼓・鈴・鉦を演奏しながら歌い舞う。古い形の舞で、神前から順に太鼓一人、舞人、鉦と並ぶ。楽器に合わせて舞人が、左手に扇、右手に鈴を持ち、鈴を振りながら右に三回廻る。現在その時々で参加する人数が異なり、それに応じて舞の鉦の人数が変わる。

工 忌

神社に奉仕をする人々は、身内に不幸があった場合、喪に服して、神社への出入りはしない。両親が亡くなった場合が一番重くなるが、江戸時代は実に三年三か月の長期に及んだ。その後一年一か月となり、そして平成二十四年より伊勢神宮に倣って、基本五十日と変わった。それにしても忌に対して厳しい。ケガレが及ばないようにと、火を別にする。これをセセラといい、セセラ小屋を建てて別火生活をする。昭和十年頃から小屋ではなく、座敷内に青竹を組んで区別した。⁸今はない。出産のときも夫は二十日、妻は四十日別火生活をしていたが、昭和十年頃から妻だけとなり、今はこれもなくなくなった。

神職に対する潔斎はさらに厳しく、今でも別火は行われている。釜、食器、布団まで潔斎用は別にする。肉食は許されないが、玉子は食べることができた。洗濯も男女、上のもの・下のもの、普段のもの・お宮のものと洗濯機三台で分けて洗う。干す場所もアイロンも別々である。

社人の身内に不幸があった場合、かなり業務に影響がでてしま

う。かつて社人が三人だったときに、義母が亡くなった社人が、百五十日間服忌に入り出社しなかった。そのため御番も二人で回さなければならなかったという。⁹

(三)七夕祭

八月七日に七夕祭がある。かつて旧七月七日だった。先んじて前日六日午前九時に七夕朝祭、午後五時に夕祭も斎行する。起源は不詳だが、ただ貝原益軒の『筑前国続風土記』にも、当時の七夕祭の様子が描かれている。「七月七日 恒例の大祭あり此日 おちこちよりもうでくる人多くして所々の商人 品々のうり物を 持ちつどいて村中市をなす」と、当時は、参道に多くの店が出て、多くの人々で賑わったという。現在出店はないが、境内で「事なき柴」と「志賀茶」を頒布して賑わっている。それを求めて、志賀島内だけではなく、近辺の島からも漁師がやってくる。

ア 志賀島の「事なき柴」

八月五日は、一日かけて、祭り当日に頒布する「事なき柴」を作製して準備をする。同時に頒布する「志賀茶」は、八女茶が三〇¹⁰入っている。福岡市東区香住ヶ丘のお茶屋から仕入れており、三百個用意する。六百円である。神さまにお供えるお茶といい、お盆の仏さまに使ってもよいという。ふだん使いのお茶ではないので、少量入りにしている。もちろんお祓いを済ませている。

一方、「事なき柴」である。椎の枝四、五本を束にして、紙垂を挟みこんだ竹を添えて束にする（写真2）。氏子総代によって作製

される。まず、島内中央部の潮見公園から入ったところの山中で、椎の木を伐ってくる。軽トラックで運び、漁業組合の倉庫に広げて、一日かけての作業だ。大きく伐ってきた枝を長さ四〇センチ程度に切っていく、形よく束にして仕上げていく。大きなコンテナにまとめられ、水を張って、祭りの日まで保管される。七夕祭当日、拝殿においてお祓いをしてから、境内で頒布する。事なき柴は四百円である。現在四、五百本作るが、かつては八百本ほど作っていた。それほど求める人が多かったのである。

祭り当日、島内の者だけでなく、玄界島や福岡市西区西ノ浦の漁師も買いに来る。どちらかというと、島外の人は六日、島内の者は七日と自然に分かれているという。六日の早朝、漁船に大漁旗、日の丸を揚げて島にやってくる。かつて午前四時過ぎには来ていたというが、二〇二〇年はコロナの影響で小学校がまだ休みではないため、その数は減って出足も遅く、一番船は六時をまわっていた。フエリー乗り場の横の広場には、前日大漁旗が三方に張られており、



写真2 志賀島の「事なき柴」

その先の防波堤に島外からの船が着く。志賀島に来ることができなかった者は、行く者に購入を依頼し、忌がかかっている者も代理に購入を依頼する。そのため一人で十本ほど買っている人もいる。

「事なき柴」は、その名

のとおり「事がない柴」で、つまり災難も何事もなく無事帰ることが出来るものとして信仰される。志賀島では船にはつけず、家に祀る。玄関先、玄関の靴箱の上、神棚と飾る場所は家によって様々だが、

いずれも出かけるときに葉を一枚取ってポケットに忍ばせる。これがお守りとなる。前年のものは神社に持ち込み、「お返し」する。神社では、それをまとめてお焚き上げにする。また現在では、葉を直接ポケットに入れたのでは、ポケットの中で粉々となつて大変だというわけで、葉を一枚プラスチックで挟みこんでカード化し、社務所で販売している。二〇二〇年に島に來た人の話によれば、玄界島の漁師は、玄関と船と両方に飾り、出かけるときには、やはり葉を一枚取って身に着けている。西ノ浦では、自宅の床の間、神棚に祀り、葉を取ることはしない。事なき柴の使い方は、現在では各地、各家で異なっているようだ。

「事なき柴」は、神社の伝承では、神功皇后伝承に由来がある。神功皇后が新羅の役の時に、志賀海神社にてその無事成功を祈願された結果、戦いに勝利をおさめられた。そして無事帰還されたことを喜ばれ、奉賛の祭典を奉仕されたという。その際、御船の舵の柄である椎の木を境内勝山山中に挿し立てられた。後に、その舵の柄



写真3 志賀島の玄関先の「事なき柴」

から芽吹いた葉を「事なき柴」にしたという。その他の神事でも、島では榊ではなく、椎の木を用いている。

(二) 小結

志賀島の志賀海神社では、毎年七夕祭として「事なき柴」を頒布する。氏子総代の手によって作製され、神職によって清められたものである。「柴」と名がついているが、ここでは椎の木を使用する。志賀海神社の神事においては、椎の木が神聖なる木として多用される。榊は使わない。俗に「山誉め祭」という四月十五日の「山ほめたまふかりすなりのおまつり誉種蒔漁獵祭」と十一月十五日の「山やまめかりすなりのまつり誉種蒔漁獵祭」では、神籬ひもろぎとして登場している。この祭りは、海の恵みは山から得られるといい、山を誉めて豊かな恵みをいただこうとするものだ。神籬は、その祈りの対象でもあり、依代で祓串にもなっている。

志賀島の「事なき柴」は、家に取り付け、すべての無事を祈願する。そして島内だけでなく、近郊の島にも信仰が浸透している。

おわりに

今回、福岡県遠賀郡芦屋町から宗像市大島に参詣し、大島のハマビワを使用して作製された「事なき柴」と、福岡市志賀島で作成され七夕祭で頒布される「事なき柴」と比較してみた。いずれもその名前の通り、何事も起きないように無事を祈願するものだった。ただ、前者は、宗像市大島の島内の者は一切関わらない。芦屋町からわざわざやって来て、「事なき柴」を作って持ち帰って祀る。一方志賀島は、島内の椎の木で作製し、島内、さらにはその周辺の島で

も祀る。そして、芦屋町と志賀島では、漁師が行うにも関わらず、船にはつけない。家の玄関先などにつけるだけだ。またやはり漁師である志賀島周辺の島では、船にもつけている。このように、祀り方はさまざまである。

出かけるときに、何も起こらぬことを祈願する「事なき柴」と同様の使い方をするものとして、博多の「お潮井砂」がある。福岡市東区の宮崎宮の北の浜で、社日^{じにち}にいただいてくる海砂である。「お潮井てば」という小さな竹籠に入れて玄関先に置き、出かける者の足元にかけて、その無事を祈願する。

お潮井砂は、志賀島でも清める力があると大切にされている。写真3のように、個人宅の玄関にも置かれるが、前述したように志賀海神社の入口、並びに拝殿前には砂が置かれ、神社に入る前、参拝する前に自ら左、右、左と砂をかけて清めるようになっていた。神社の東側の海岸に注連縄が張られた「お潮井場」があり、ここでお潮井砂をいただいている。前述「山誉め祭」の神籬を固定するのは、このお潮井砂である。また一月十五日前後に行われる「歩射ほしや祭」は、特にお潮井砂の力が発揮される場である。新年にあたり、その年の豊穰を祈願するとともに、成人儀礼として、清めの矢を射る祭りである。射手自身を清めるだけでなく、的、矢、射場も、お潮井砂で清める。また的に当てることができないう若者には、後ろから肩にお潮井砂をかける。すると、途端に的を射止めることができるのだ。

また芦屋町では、炊事場のところの荒神さまにシバを供えるが、特に思うようなところに出かける場合は、何事も起こらないように

と今でもその葉を一枚取って持参し、無事を祈願するという。毎月一日と十五日には、きちんとシバは新しいものに取り換えられる。

芦屋町も志賀島も漁業を生業とする地域という他、神功皇后の伝承地という共通点もある。志賀島では、神功皇后の伝承が数多く残り、「事なき柴」もその一つであった。一方、芦屋町では、「事なき柴」と神功皇后との関連をいわないが、先に述べた『日本書紀』にあるように、立ち寄られた伝承地である。

しかし志賀島も芦屋町も、祭神の性質や、実際の生業である漁との関わりなどから考えてみると、神功皇后伝承・信仰というよりも、沖ノ島への信仰、海の神への信仰として、「事なき柴」は漁師たちに守り伝えられてきたのであろう。神の力が依りつく「事なき柴」をいただくということは、芦屋町は沖ノ島に祀られる宗像三女神の力、志賀島は海神綿津見三神の力をいただくのであろう。また、芦屋町から大島にやってきて「事なき柴」を作製することが目をひくが、実は志賀島に周辺の島からやって来て買い求めることと同じことで、違和感はない。いずれにしてもそこに祀られる神の依代として、呪物として「事なき柴」を祀っている。材料も形も異なるが、その地の信仰の現れと考えられ、航海の安全と豊漁を祈願するだけにとどまらず、さらに生活全般の安全を祈願していた。これが「事なき柴」である。

謝辞、遠賀漁業協同組合芦屋支所中西隆雄氏、志賀海神社平澤憲子氏、氏子総代小林憲吾氏に、さまざまご教示いただきました。記して、感謝申し上げます。

後註

- (1) 『筑前国統風土記』巻之五 那珂郡
 - (2) 『八幡愚童訓』筑紫本
 - (3) 『福岡県文化財調査報告書』第二十四集、福岡県教育委員会、一九六二年
 - (4) 三松壮一「志賀島雑記」『福岡』No.50、東西文化社、一九三二年
 - (5) 『福岡県神社誌』上巻、大日本神祇會福岡県支部、一九四四年
 - (6) 註3
 - (7) 註3
 - (8) 註3
 - (9) 福岡市史編集委員会編『福岡市史』民俗編二ひとと人々、福岡市、二〇一五年
- (よしだふきこ 民俗・美術・建築部会)